

稲・大豆作情報（NO. 5）

Ⅰ. 水稻作況情報田の生育概況（7月30日現在）

品 種 場 所	移植日 栽植株数	年 次	現在の生育状況				概況
			草 丈 c m	茎 数 本／㎡	葉 齢	葉色 SPAD	
夢しずく 上峰町	6/7 15.8株/㎡	本 年 平 年 平年比	93.2 87.9 (106)	306 326 (92)	12.2 12.3 (+0.1)	41.6 38.4 (+3.2)	7/20以降、降雨は殆ど無く、 35℃以上の高温多照で経過し ている。 ○草丈は「夢しずく」で平年 よりやや高く、「ヒヨクモチ」 で平年より低い。 ○茎数は、「夢しずく」で平 年より少なく、「ヒヨクモチ」 でやや多い。 ○葉齢から見た生育の早遅は 、「夢しずく」、「ヒヨクモ チ」とともに平年並み。
ヒヨクモチ 千代田町	6/20 16.0株/㎡	本 年 平 年 平年比	52.7 56.7 (93)	715 689 (104)	11.9 12.0 (-0.1)	41.3 40.5 (+0.8)	
ひなたまる 千代田町	6/20 17.6株/㎡	本 年 平 年 平年比	67.7 - -	391 - -	11.6 - -	41.9	

注1) 各品種 前作：麦 注2) 施肥及び病虫害防除は地区基準に準ずる

注3) 平年値は、過去10年間（H27～R6）の平均値

注4) 「さがびより」は本年は情報田を設置しておらず、以下の農業試験研究センター米づくり情報を参考としてください。

注5) ひなたまるはR7年から作付けのため、本年のみの記載になります。

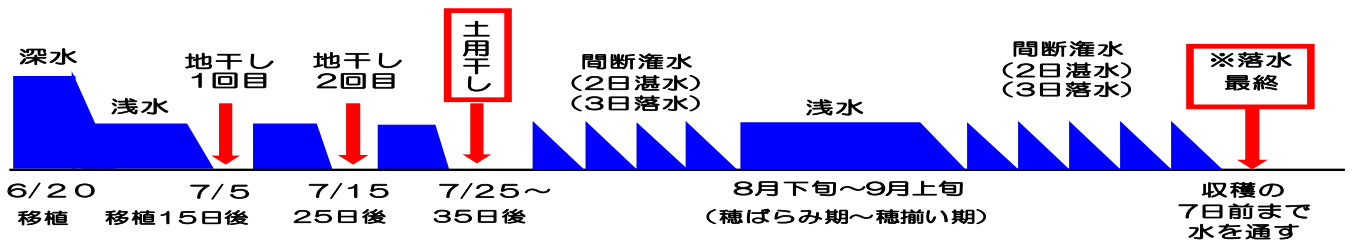
◆農業試験研究センター米づくり情報5号 7月30日（抜粋）

移植日	項目 品種	年 次	草 丈 cm	茎 数 本／㎡	葉 齢 L	葉色 SPAD	概 況 (平年または前年との比較)
6 月 18 日	夢しずく	本 年	77.9	363	11.5	40.5	【気象】 7月23日～29日まで ◆平均気温…2.9℃高い ◆日照時間…長い (平年比 176%) ◆降水量…少ない (平年比 0%) 【生育】 ◆草丈 全品種で高い。 ◆茎数 「夢しずく」、「ヒノヒカリ」は少なく、「ひなたまる」、「さがびより」、「ヒヨクモチ」は多い。 ◆葉齢 「夢しずく」は平年並み、その他の品種はやや進んでいる。 ◆葉色(SPAD 値) 「夢しずく」はやや濃く、「ヒノヒカリ」、「さがびより」、「ヒヨクモチ」は平年並み、「ひなたまる」はやや淡い。
		平 年	72.6	415	11.5	39.1	
		平年比(差)	107	87	(±0)	(+1.4)	
	ヒノ ヒカリ	本 年	70.3	462	11.9	39.7	
		平 年	66.4	545	11.5	40.1	
		平年比(差)	106	85	(+0.4)	(-0.4)	
ひなた まる	本 年	70.4	453	12.2	41.3		
	前 年	62.0	335	12.0	42.8		
	前年比(差)	114	135	(+0.2)	(-1.5)		
6 月 20 日	さが びより	本 年	70.0	579	11.8	40.3	
		平 年	63.3	535	11.6	39.9	
		平年比(差)	111	108	(+0.2)	(+0.4)	
	ヒヨク モチ	本 年	66.3	893	12.3	40.2	
		平 年	58.5	824	12.1	40.8	
		平年比(差)	113	108	(+0.2)	(-0.6)	
留意点	○「夢しずく」は幼穂形成期を迎えているため、穂肥診断に基づき遅れないように穂肥を施用する。 ○「ひなたまる」「ヒノヒカリ」「さがびより」「ヒヨクモチ」等の中晩生品種は、中干しが終わり次第、間断灌水に切り替える。茎数が少ない圃場では中干しはやや軽めにとどめ、幼穂形成期前には終了する。 ○病虫害の発生に注意する。農業技術防除センターの情報を参考にするとともに、圃場の観察により防除を的確に行う。						

※耕種概要等は前号参照。

2. 水稻における今後の管理

○水管理 ～ 圃場の状況に応じた水管理の徹底 ～



「夢しずく」

- ・早植えの「夢しずく」(5月下旬～6月上旬移植)は、穂ばらみ期を、普通期の「夢しずく」(6月中旬移植)は、幼穂形成期を迎えている。
- ・早植えの「夢しずく」は、水の要求度が高い時期のため穂揃い期まで浅水状態で湛水を保つ。
- ・普通期の「夢しずく」は、穂ばらみ期まで「間断灌水(2日湛水3日落水)」を実施し、穂ばらみ期～穂揃い期まで浅水状態で湛水を保つ。

「ヒノヒカリ」、「ひなたまる」、「さがびより」、「ヒヨクモチ」

- ・「ヒノヒカリ」「ひなたまる」は間もなく幼穂形成期を迎え、「さがびより」では、8月10日頃から幼穂形成期を迎える見込みである。
- ・幼穂形成期以降は、稲が水を必要とする時期なので、「中干し」を継続している圃場では早急に入水し、穂揃い期まで浅水で湛水状態を保つ。なお、移植が遅れた圃場などでも、遅くとも8月上旬までは中干しを終えるよう注意する。
- ・「ヒヨクモチ」は、8月中旬頃に幼穂形成期を迎えるので、湛水管理に移行する。

○穂肥 ～ 散布時は入水し、湛水状態で施用 ～

「夢しずく」

- ・普通期の「夢しずく」(6月中旬移植)では、幼穂形成期を迎えている。
- ・高温が続くと、光合成で生成した澱粉の殆どを呼吸で消費し、籾への澱粉の蓄積が不足する。施用が遅れないように表2の穂肥診断基準(草丈・葉色・幼穂長)に基づき、穂肥を施用する。

表1. 「夢しずく」穂肥診断基準表

幼穂形成始期 の草丈	葉 色	施 用 時 期		穂肥施用量、()は山麓	
	葉緑素計	出穂前	幼穂長	N成分 kg/10a	BB602 kg/10a
73cm以下	34以下	20～22日	1 mm	2.0 (3.0)	12.5(20.0)
	34～38	18～20日	2 mm	1.5	10.0
	39以上	施用しない			
73～79cm	34～39	18～20日	2 mm	1.0 (1.5)	6.0 (10.0)
	40以上	施 用 し な い			
80cm以上	原則として施用しない				

※草丈は、幼穂の伸長程度により幼穂形成期(1 mm)を基点に、前後1日あたり1 cm増減する。

※出穂前15日以降の穂肥は、玄米タンパク値を上昇させるので施用しない。

「ヒノヒカリ」

- ・「ヒノヒカリ」は、8月5～8日頃に幼穂形成期を迎え、穂肥施用時期を迎える見込みです。
- ・施用時期が遅れないように表3の穂肥診断基準（草丈・葉色・幼穂長）に基づき、穂肥を施用する。

★「ヒノヒカリ」の穂肥施用のポイント

- ①出穂前18～20日（幼穂の長さ3～5mm）に施用。
- ②草丈が80cm以上で葉色が濃い（SPAD値40以上）場合は施用しない。
- ③草丈が80cm以下で、葉色が薄い（SPAD値34以下）場合は、2日程度早める。
（出穂前22～20日で幼穂長1～2mm）に施用。

表2. 「ヒノヒカリ」穂肥診断基準

幼穂形成始期の 草丈	葉 色	施 用 時 期		穂肥施用量	
	葉緑素計	出穂前	幼穂長	N成分 kg/10a	BB602 kg/10a
80cm以下	34以下	20～24日	1～2mm	3.0	20.0
	34～38	18～20日	3～5mm	3.0	20.0
	38～39	16～18日	5～15mm	2.0	12.5
	40以上	—	15～30mm	—	施用しない
80cm以上	34～38	18～20日	3～5mm	2.0	12.5
	38～39	16～18日	5～15mm	1.5	10.0
	40以上	—	15～30mm	—	施用しない

※隣接圃場が「ヒヨクモチ」だと葉色が淡く見えますので留意してください。

「ひなたまる」

- ・「ひなたまる」は、8月5～8日頃に幼穂形成期を迎え、穂肥施用時期を迎える見込みです。
- ・施用時期が遅れないように下の穂肥施用のポイント（草丈・幼穂長）に基づき、穂肥を施用する。

★「ひなたまる」の穂肥施用のポイント

- ①出穂前18～20日（幼穂の長さ5mm程度）に施用。
- ②草丈が80cm以下の場合、窒素成分で3kg/10a（BB602で20kg/10a）を施用する。
- ③草丈が80cm以上85cm未満の場合は、地力に応じて減肥する。
- ④草丈が85cm以上の場合は、穂肥施用は控える。

※出穂前15日以降の穂肥は、玄米タンパク値を上昇させるので施用しない

「さがびより」

- ・「さがびより」は、8月10日頃から幼穂形成期を迎える見込みである。
- ・施用時期は、幼穂長5～10mmが基準。5mmに達したのを確認し施用する。
- ・本年は、平年に比べ草丈が低く、分けつ数も少ないため「さがびより」の穂肥診断基準は、下記のとおり県基準に準じた基準での診断とする。（平坦～山麓まで共通）

★「さがびより」の穂肥施用のポイント

- ①早くても幼穂5mmを確認してから施用する。
- ②出穂前18日（幼穂の長さ10mm）に施用。
- ②草丈が75cm以上で葉色が濃い（SPAD値37以上）場合は施用しない。
- ③草丈が75cm以下で、葉色が薄い（SPAD値33以下）場合は、2日程度早める。
（出穂前22～20日に施用）

表3.「さがびより」穂肥診断基準

幼穂形成始期 (幼穂長1mm) の草丈	葉 色		施 用 時 期		穂肥施用量	
	群落	葉緑素計	出穂前	幼穂長	N成分 (kg/10a)	BB602 (kg/10a)
75cm以下	2.5以下	33以下	18～20日	5mm	2. 5	15.6
	3.0	33～37	18日	10mm	2. 0	12.5
	3.5	37～38	16日	15mm	1. 0	6.0
	3.8以上	39以上	施 用 し な い			
75～80cm	3.0以下	36以下	18～20日	10～15mm	1. 5	9.4
	3.0以上	37以上	施用しない			
80cm以上	施 用 し な い					

※葉色が濃い圃場や幼穂長が15mm以上になっている圃場は、穂肥は施用しない。

「ヒヨクモチ」

- ・「ヒヨクモチ」は、8月15日頃から幼穂形成期を迎える見込みです。
- ・穂肥は表4の施肥基準を参考に施用する

表4. ヒヨクモチの穂肥施肥基準

	穂肥Ⅰ施用量(kg/10a)	穂肥Ⅱ施用(kg/10a)	実肥施用量(kg/10a)
施用時期の目安	8月15～17日頃 (幼穂形成始期 幼穂長1ミリ頃)	8月25～27日 (穂肥Ⅰの10日後)	穂揃期 (9月8日～10日頃)
LPBB804	40	—	—
BB602	25	10	10

※「元肥一発肥料」を施用した圃場で、穂肥Ⅰ～Ⅱの時期に葉緑素計(SPAD)で40を切る場合、窒素成分で2kg/10a程度(BB602 15kg/10a)施用する。大豆跡では、上記の5割未満に減肥して施用する。

○台風対策(台風の接近が懸念される場合の事前及び事後対策)

- ・台風接近時 → ①強風による稔実阻害(不稔、白穂などの発生)や登熟阻害(粃ズレにより病気や雑菌の感染)が懸念されるため、深水管理とし稲体の振動を少なくする。
②いずれの品種も、茎葉の繁茂度が高く、水分の蒸散量が著しい時期となるため、必ず深水・湛水を行う。(中干し中であっても必ず深水管理とする)
- ・台風通過後 → ①茎葉の損傷により根の老化が進むことがあるので、台風通過後は必ず新しい水と入れ替えて、こまめに間断灌水を行い、根の機能維持・生育回復に努める。
②水田に海水流入による浸冠水や潮風害を受けた場合は、直ちに排水し真水と入れ替える。
できれば掛け流しを行って除塩するか、少なくとも2～3回は水を入れ替え、生育回復に努める。
③台風通過後は受光体制が乱れ、ウンカや白葉枯れ病等が発生しやすくなるため、トビイロウンカの発生には十分注意し、場合により薬剤防除を検討する。

○雑草防除

- ・除草剤散布ができなかった圃場や散布が遅れた圃場、及び処理後に田面が露出した圃場などでは、放置するとヒエや広葉雑草が繁茂し、薬剤による雑草防除が困難となるため、中後期除草剤との体系処理を検討する。なお、藻類や表層剥離が多発し除草効果の低下が懸念される圃場でも、ヒエや広葉雑草の発生が懸念されるため、圃場の状況を確認し、中後期除草剤との体系処理を検討する。

対象	除草剤名	使用時期	備考
ヒエ類	クリンチャー I 和粒剤	移植後 7 日～バ ^レ ィ 4L 但し、収穫 30 日前まで	湛水散布（3～4 日は湛水）
	クリンチャー EW	移植後 20 日～バ ^レ ィ 6L 但し、収穫 30 日前まで	落水散布。展着剤加用。
	ヒエクリーン I 和粒剤	移植後 15 日～バ ^レ ィ 4L 但し、収穫 45 日前まで	湛水散布（3～4 日は湛水）
広葉雑草	バサグラン粒剤	移植後 15 日～55 日 但し収穫 60 日前まで	落水～ごく浅く湛水散布。 最低3日間入落水しない。
	バサグラン液剤	移植後 15 日～55 日 但し収穫 50 日前まで	高温条件下では、薬害が生じやすいので夕方散布。
ヒエ類 および 広葉雑草	クリンチャーバス ME 液剤	移植後 15 日～バ ^レ ィ 5L 但し収穫 50 日前まで	落水～ごく浅く湛水散布。最低3日間入落水しない。高温条件下では、薬害が生じやすいので夕方散布。（展着剤無加用）
	フォローアップ I 和粒剤	移植後 15 日～バ ^レ ィ 5L （稲 4 葉期以降） 但し、収穫 60 日前まで	湛水散布（3～5 日は湛水）
	ワイドアタック SC	移植後 20 日～バ ^レ ィ 6L （稲 5 葉期以降） 但し、収穫 30 日前まで	落水～ごく浅く湛水散布。（展着剤無加用）
	ロイアント乳剤	移植後 20 日～バ ^レ ィ 5L 但し、収穫 45 日前まで	落水散布～ごく浅く湛水散布。

○病虫害情報（発生および防除）

- ・セジロウンカとトビイロウンカは6月16日～23日に飛来が確認されている。
- ・コブノメイガは6月16日頃から飛来が確認されている。
- ・今後、発生予測は随時更新されるため、防除の考え方等については、最新情報を農業技術防除センターのホームページで確認してください。

佐賀県 農業技術防除センター



図1 トビイロウンカ各世代の発生予測（第1版、2025年7月2日作成）

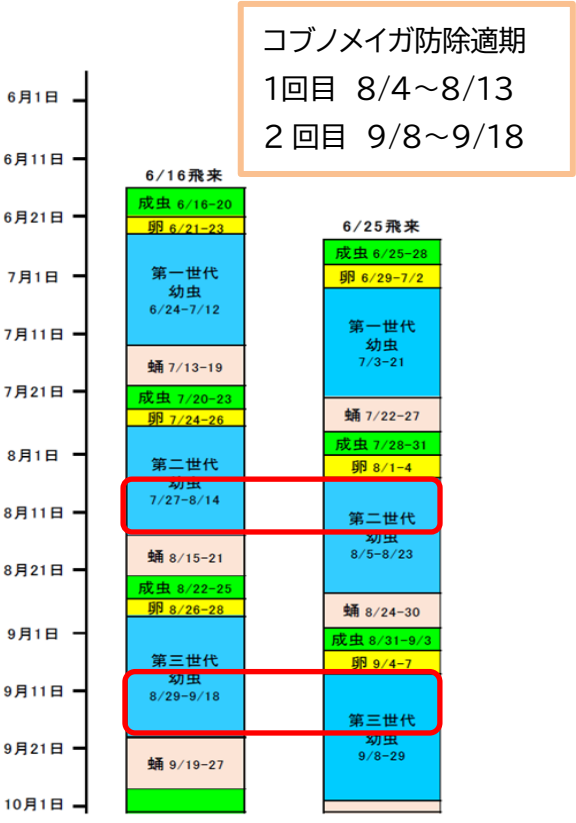


図2 コブノメイガ各世代の発生予測（第1版、2025年7月2日作成）

【斑点米カメムシ類】

- ・8月の気象予報では、気温が高く、多発生条件となっている。
- ・出穂後の除草は、水田に斑点米カメムシ類を誘い込み被害に繋がるため、出穂10日前までに畦畔除草を行う。
- ・山麓部や河川敷付近など、例年発生の多い圃場では田廻りを励行し、防除を徹底する。
- ・防除はカメムシが穂に上ってくる夕方に行うと効果が高い。

表4. 各品種別の草刈り時期の目安

品種名	出穂期（平年）	出穂10日前
夢しずく	8/16	～8/6頃まで
ヒノヒカリ・ひなたまる	8/27	～8/17頃まで
さがびより	8/30	～8/20頃まで
ヒヨクモチ	9/10	～8/31頃まで

※出穂期（平年）は、佐城管内における情報田のデータの平均値

【イネカメムシ】

- ・イネカメムシは、近年全国的に被害が拡大している斑点米カメムシの一種です。昨年、本県において広く分布していることが確認されています。本種は、水稻の出穂始めに粃を吸汁して不稔にし、大きな減収被害を生じさせます。他の斑点米カメムシ類とは異なる特徴があり、適期の本田防除が必要となります。

（防除対策）

- 1) 圃場内をよく観察し、本種の早期発見に努める。特に、周辺より出穂が極端に早い、又は遅い圃場では、本種の飛来が集中するため、発生状況を注意深く観察する。
- 2) 出穂前に本種の発生を認めた圃場では、通常の斑点米カメムシ類の防除適期である穂揃い期～乳熟期の防除だけでなく、発生状況に応じて出穂期の薬剤散布を実施する。



イネカメムシの成虫（左）及び幼虫（右）

【紋枯病】

- ・8月の気象予報では、気温が高く、多発生条件となっている。
- ・近年、多発傾向にあるため、発生を認めた圃場では病斑が上位の葉鞘に進展（垂直進展）する時期に防除を徹底する。（液剤、粉剤の場合は出穂10～20日前を目安とする）
- ・病斑が上位3葉の葉鞘に達している場合は直ちに薬剤防除を行う。



3.大豆における今後の管理

1 大豆の生育状況

- ・ 7月3～4日播種の圃場で7～8葉期、7/12～13播種の圃場では5～6葉期となっている。
- ・ 7月20～22日に播種した圃場では、1葉～2葉展開期となっている。

2 干ばつ対策について

1) 乾燥で大豆が萎れ始めている圃場での対応

- ・ 7/21以降、降雨がほとんど見られず圃場の土壌が乾燥することにより、大豆の草冠が夜間も立っていたり、萎れ始めている圃場（写真1）が散見されます。このような圃場では、夕方以降にうね間灌水を検討する。

なお、平うねでの灌水は排水が遅延することから種子の腐敗を招くことが多いので、うね溝を設けるなどの事前作業を実施する。

【畝間灌水のポイント】



写真3 大豆での畝間灌水の状況（R6.8月）

- ・ 圃場が白乾しひび割れた状態になる前に灌水を行うようにする。
- （過乾燥状態になると土壌内部に亀裂が入り、畝間灌水しても圃場の先端まで水が行き渡らない。）



写真4 乾燥により萎凋した大豆

注：うね間灌水後は雑草の発生が多くなるため早めに除草剤散布等の雑草対策を行う。

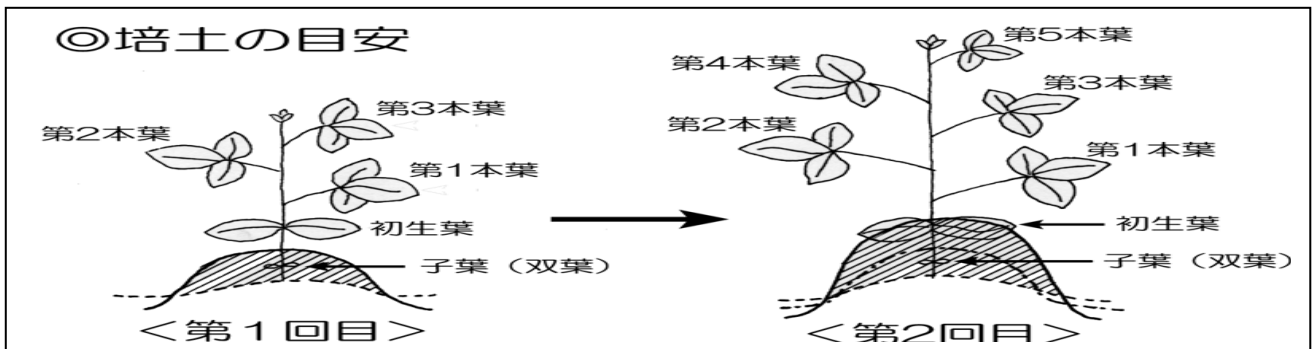
- ・ 週間天気予報を見ると、晴天が続く予報のためコルゲート管の閉栓が土壌水分確保に有効である。



3 中耕・培土の実施

- ・7月中旬播種の大豆も中耕・培土の時期を迎えているが、本年は7/20以降纏まった降雨がほとんど無く土壌は過乾燥となっており、中耕・培土は避けて、雑草防除が必要な場合のみごく浅く中耕を行う。

【 高温・干ばつ時の中耕・培土の注意点 】



1. 開花期近くの中耕・・・✕
うね間に張り出した根量が多く、大豆へのダメージが大きい。
2. 日中、高温時の作業・・・✕
断根に加え、大豆の蒸散量が大きく、ダメージが大きい。
3. 株元まで土がかかっていない・・・✕
培土の目的：不定根の発生 → 根粒菌の活性化、倒伏軽減

中耕・培土は、1回目を3葉期頃、
2回目を5葉期頃に実施する。
2回目は、株元（子葉の下）まで土
がしっかりかかるように実施する。



4 雑草防除

1) 播種後対策

播種直後に土壌処理剤を散布し、雑草防除を行う。特に、近年問題となっているホオズキの発生が多い圃場では、「ラクサー乳剤」「フルミオ WGD」、アサガオの発生が多い圃場では、「ラクサー乳剤」「サターンバアロ乳剤」との混用が効果的である。

土壌処理除草剤の効果を高めるため、碎土・整地を丁寧に行い、播種後の鎮圧を必ず実施する。液剤の場合は、使用基準内で、多めの散布水量で散布する。

なお、播種直後の散布でも隣接圃場の水稻へドリフト防止のため風速と風向きに注意し、風が強い日には散布しない。

2) 難防除雑草への対応

アサガオ類やホオズキ類の難防除雑草の発生が多い地域では、圃場内侵入防止に努め、見つけ次第手で抜き取る。

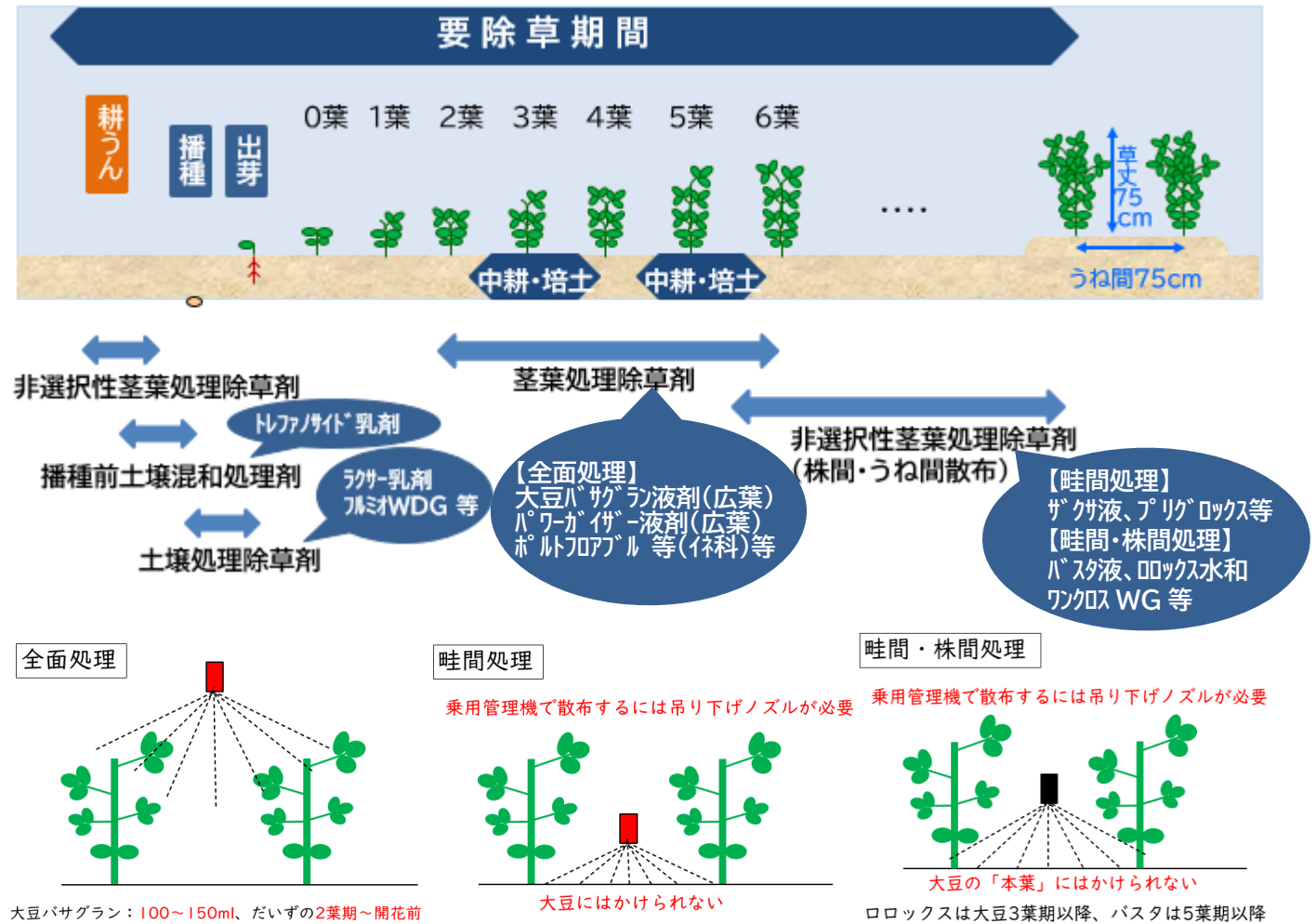
圃場内に発生している場合、多発すると大豆の作付け自体が困難になるため発生が少ないうちに、雑草の開花や結実前までの茎葉処理除草剤のスポット処理や手取りの防除に努める。

ツユクサ類（近年、特にカロライナツユクサが蔓延）は土壌処理剤の効果が十分ではないため、「プリグロックスL」や茎葉処理剤（大豆バサグラン等）での除草を基本とする。

- 3) 大豆は初期生育が早く、大豆の茎葉が繁茂することで雑草発生を抑制できるので、雑草の発生が少なければ、大豆生育期（2～5葉期）に中耕培土で防除が可能である。

※降雨等で除草剤の散布ができなかった圃場では、早めの中耕培土で雑草対策を行う。

■除草技術と実施時期の目安



5 病虫害対策（発生及び防除）

【ハスモンヨトウ】

- ・夏季が高温少雨で経過した年は、発生が多く増殖に伴う被害拡大が懸念されるため、フェロモントラップの捕殺数や圃場毎に白変葉の増加に注意する。
- ・播種期が早い管内の一部圃場では白変葉が散見され、ハスモンヨトウの幼虫も確認されている。
- ・防除適期は、若令幼虫による白変葉が見られ始めた頃であり、防除が遅れ中齢幼虫以上（体長約2cm以上）になると、防除効果が低下するため、圃場をよく観察し適期防除を実施する。
- ・防除後約3日経過した後も高い密度で食害を続けている時は、再防除が必要である。
- ・ハスモンヨトウには、フェニックスフロアブル、プレバソンフロアブルは感受性が低下しており、使用を避ける。

②【オオタバコガ・ウワバ類】

- ・気象予報では高温少雨が予測され、ハスモンヨトウと同様に、多発生の条件となっている。
- ・葉に大きな穴が開いた株が目立ち、周辺に青虫がいる場合は、オオタバコガによる食害の可能性が高くウワバ類やシロイチモジヨトウが含まれる場合もある。
- ・オオタバコガやシロイチモジヨトウには、ノーモルト、トレボン感受性が低下しており、使用を避ける。

表1. 防除薬剤（効果が強い薬剤）

	ハスモンヨトウ	オオタバコガ、シロイチモジヨトウ
薬剤名	ブロフレア, グレーシア, プレオ, ディアナ等	ブロフレア, グレーシア, プレオ, 等

令和7年産 水稻生育期間気象グラフ

(アメダス観測地点：佐賀，データ更新日：7月30日)

三神農業振興センター

